

## キリシタン資料における「sonsonete」 — 『対訳ラテン語語彙集』から —

馬場 良二

### 0. はじめに

私は、1989年に熊本女子大学に赴任して以来、イエズス会士 João Rodriguez の『ARTE GRANDE』を読んでいます。『ARTE GRANDE』というのは、長崎で印刷され、1608年ごろ<sup>1</sup>に出版された日本語の文法書です。当時のイエズス会士たちに日本語を教えるために編まれたもので、世界に2部しかのこっていません。1部は英国オックスフォード大学の Bodleian 図書館にあり、1部はスコットランドの Crawford 伯爵家が持っています。Crawford 本を見せてもらいにエジンバラのスコットランド国立図書館へ行った時、親しくなった司書に「何で2冊しか残っていないんだろう」と聞いたら、「日本では、キリスト教が禁止されたんだろ?」と問い返されました。そう、『ARTE GRANDE』はヨーロッパ人が作ったものだけけれど、日本にいるイエズス会士たちの日本語教育のためのもので、他の地では必要がない。何冊かはバチカンに送られたらうけれど、ほとんどは日本にあり、そして、焼かれたんだ。

『ARTE GRANDE』の成り立ちと構成、用語を研究し、当時のポルトガル人がそれを通して日本語を見た、古典ラテン語とポルトガル語のフィルターがどのようなものであるかあきらかにしようとしています。そして、2017年発行の第13号『文彩』の「João Rodriguez を追いつけて」では、『ARTE GRANDE』の中での、用語「sonsonete」の意味と用法について、先達の研究の誤謬にふれ、キリシタン資料をつかった日本語研究の姿勢を批判しました。

その「João Rodriguez を追いつけて」の最後で、「研究がすすみ、『ARTE GRANDE』に私の見つけきらなかった「sonsonete」が三つあること、また、『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』、『サントスの御作業』に「sonsonete」があらわれていることがわかった。前者に関しては、今年度の紀要に盛り込むつもりだ。後者に関しては、詳細に検討し、来年度の紀要に書こ

---

<sup>1</sup> 「1608年ごろ」としたのは、表紙には「1604年」となっているのに、奥付では「1608年」となっているからです。多分、出版許可を得たのが1604年で、奥付の版組が「1608年」だったのだらうと思います。

No Fijen, & em muytas partes deste Ximo, a letra, Y, despois de, A, ou, O, mudam em, E, na pronunciaçam com certo **sonsonete** muyto roim Vt, Xecai, dizem, Xecae, Yoi, Yoe, Amai, Amae, Daiji, Dacji, Taixet, Taaxet, Firoi, Foroe, Curoi, Curoe, &c. De modo que lhe fica como entre dentes.

クロフォード家本『ARTE GRANDE』第170葉から、「Fijen (肥前) では、非常にひどい sonsonete をもって、「世界」、「良い」、「甘い」を「せかえ」、「よえ」、「あまえ」と発音する。

うと思う。」と述べました。間違いなく、前者については2016年度の紀要に書きました。「João Rodriguez's 'sonsonete' in ARTE GRANDE」です。

後者について、つまり、『ARTE GRANDE』ではなく、キリシタン資料である『羅葡日対訳辞書』、『日葡辞書』、『サントスの御作業』にあらわれる、さらに、Jerónimo Cardoso の編んだラテン語-ポルトガル語辞書と Bento Pereyra のポルトガル語-ラテン語辞書にあらわれた「sonsonete」について、調べたことをここにまとめました。

## 1. 「キリシタン資料」とは

私が思うに、世界最初の組織的<sup>2</sup>な日本語教育は、この九州におけるイエズス会によるものでした。

1543年にポルトガル人が種子島に鉄砲を持って、やってきました。1549年には、あのフランシスコ・ザビエル<sup>3</sup>が日本に來日、布教はすすんで、1577年に João Rodriguez が來ました。当時は、まだ10代半ばの少年だったようです。1582年に大友宗麟、大村純忠、有馬晴信の名代として天正遣欧使節団がバチカンにおくられたころが、日本におけるカト

<sup>2</sup> 韓半島と日本は物理的に近く、イカダでも往来ができます。熊本県と姉妹関係にある大韓民国、忠清南道の公州市にある古墳、武寧王陵は景観が藤ノ木古墳と酷似しているし、金環の耳飾りや靴などの遺物は同じです。交流は古く、深く、大和の人が半島に、そして、大陸人が私たちの島へ流れ着いたとき、人と人との間で日本語がかわされたに違いありません。それは、個人的な日本語教育です。

<sup>3</sup> ザビエルは、1506年頃現在のスペイン、ナバラ州に生まれ、1552年12月に中国でなくなりました。ザビエルは、イエズス会の創始者の一人で、その死の70年後の1622年3月に聖人に列せられました。聖人になること自体が大変なことですが、70年というのは異例の速さです。カトリックの世界で、ザビエルはとりわけ偉大な人だったのです。

リック布教の全盛期でした。その後、使節団が帰国する前、1587年に秀吉がバテレン追放令を發布、1612年に徳川幕府のキリシタン禁教令がだされ、本格的な迫害が始まりました。

当時の言語学習は、辞書と参考書とリーダーを使って翻訳していくのが普通でした。九州のイエズス会士たちの日本語学習もおなじで、そのために作成された書物が「キリシタン資料」<sup>4</sup>です。

15世紀にドイツのヨハネス・ゲンスフライッシュ・グーテンベルクが発明した印刷機は、天正遣欧使節団の帰国船に乗せられ、1590年に長崎県、加津佐町におかれました。このとき、すでにバテレン追放令が出されており、1591年に天草へ、1597年に長崎へ移されます。そして、1614年、マカオに追放されます。

「キリシタン資料」とは、1590年から1614年までの20数年間にこの印刷機で刷られたイエズス会の刊行物のことです。

加津佐では『SANCTOS NO GO SAGVIO : サントスの御作業』（日本語、ポルトガル語、ローマ字）<sup>5</sup>が、天草では『FIDES NO DÕXI : ヒデスの導師』（日本語、ローマ字）、『ぼうちずもの授けよう（洗礼の授け方）』<sup>6</sup>（日本語、国字）、『Doctrina Christão（公教要理）：どちりなきりしたん』（日本語、ローマ字）、『FEIQE MONOGATARI : 平家物語』（日本語、ローマ字）、『Qincuxu : 金句集』（日本語、ローマ字）、『ESOPONO FABVLAS : イソポのファブラス』（日本語、ローマ字）、『DE INSTITVTIONE GRAMMATICA : ラテン文典』（ラテン語、ポルトガル語、日本語、ローマ字）、『DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM, AC IAPONICVM : ラポ日対訳辞書』（ラテン語、ポルトガル語、日本語、ローマ字）、『Contemptus mundi : コンテムツスムンジ』（日本語、ローマ字）、『Exercitia Spiritualia（心霊修養）』（ラテン語、ローマ字）、『Compendium Spiritualis Doctrinae（精神教理提要）』（ラテン語、ローマ字）、『COMPENDIVM Manualis Nauarri（ナヴァルスの祈祷提要）』（ラテン語、ローマ字）の12種が、長崎では『さるばとるむんぢ（救世主）』

---

<sup>4</sup> 「キリシタン資料」には、ヨーロッパの人が日本語や歴史を学ぶためだけでなく、日本人がラテン語やポルトガル語、そして、ヨーロッパの文化を学ぶためのものもありました。

<sup>5</sup> （ ）内は、用いられている言語と文字を示しています。ローマ字で書かれているものの書名はローマ字で表記し、通用の国字表記をそえました。

<sup>6</sup> 『 』内の（ ）は、ポルトガル語、ラテン語の書名の日本語訳、あるいは、わかりやすい日本語にしたものです。

(日本語、国字)、『落葉集』(日本語、国字)、『ぎやどぺかとり(罪深き者を導く書)』(日本語、国字)、『朗詠雑筆』(日本語、漢文、国字)、『*Doctrina Christão* : ドチリナキリシタン』(日本語、ローマ字)、『どちらなきりしたん』(日本語、国字)、『おらしよの翻訳』(日本語、国字)、『*Aphorismi Confessariorum* (告解の金言)』(ラテン語、ローマ字)、『*VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM* (日葡辞典)』(日本語、ポルトガル語、ローマ字)、『*ARTE DA LINGOA DE IAPAM* (日本大文典)』(ポルトガル語、日本語、ローマ字)、『*Manuale ad Sacramenta* (秘跡提要)』(ラテン語、日本語、ローマ字)、『*Spiritual Xuguiö* : スピリツアル修行』(日本語、ローマ字)、『*Flosculi* (精華)』(ラテン語、ローマ字)、『ひですの経』(日本語、国字)、『太平記抜書』(日本語、国字)の15種が出版されました。

このうちの『*SANCTOS NO GO SAGVIO*』、『*FIDES NO DÖXI*』、『ばうちずもの授けよう』、『*Doctrina Christão*』、『*Contemptus mundi*』、『*Exercitia Spiritualia*』、『*Compendium Spiritualis Doctrinae*』、『*COMPENDIVM Manualis Nauarri*』、『さるばとるむんち』、『ぎやどぺかとり』、『どちらなきりしたん』、『おらしよの翻訳』、『*Aphorismi Confessariorum*』、『*Manuale ad Sacramenta*』、『*Spiritual Xuguiö*』、『ひですの経』は宗教書<sup>7</sup>、『*FEIQE MONOGATARI*』、『*Qincuxu*』、『朗詠雑筆』、『*ESOPONO FABVLAS*』、『*Flosculi*』、『太平記抜書』はリーダーです。『*FEIQE MONOGATARI*』と『太平記抜書』は、日本の歴史や社会、文化、習慣について学ぶ日本事情の書としても役に立ったことでしょうし、『*ESOPONO FABVLAS*』は日本人が西洋の文化、習慣、考え方を身に着けるのに役立ったことでしょう。『*Qincuxu*』は日本の名言を集めたもので、日本事情の書としても、また、語学の例文集としても使われたと思います。

そして、辞書には、『*DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM, AC IAPONICVM*』、『落葉集』、『*VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM*』が、文法書には『*DE INSTITVTIONE GRAMMATICA*』と『*ARTE DA LINGOA DE IAPAM*』があります<sup>7</sup>。

宗教書には日本語で書かれたものとラテン語で書かれたものがあり、後者はローマ字が用いられ、そして、前者にはローマ字と国字のものがあります。ラテン語で書かれた宗教書はヨーロッパ人がカトリックを勉

---

<sup>7</sup> ただし、『*SANCTOS NO GO SAGVIO*』の巻末には「cotoba no yauarague」があり、わかりにくいであろう日本の語をポルトガル語で説明しています。

強するために刊行されたのであろうし、日本人が神学を、そして、ラテン語を学習するためでもあったでしょう。一方、日本語で書かれたものうち、ローマ字が用いられている書物は、主にヨーロッパ人が日本語を学習するため、そして、日本人が教理などのキリスト教の知識を身に着けるためのものであったでしょう。国字を用いて日本語で書かれた宗教書は、主に、日本人の信徒や聖職者をめざす日本人が勉強するために編まれ、ときによっては、ヨーロッパからのイエズス会士たちが日本語教育のために使ったと考えられます。

リーダーに分類した中の『*Flosculi*』だけはラテン語で書かれています。「*flosculi*」というのはもともとがラテン語で「花」を意味する語で、キケロやアリストテレスなどの古典的な著作のアンソロジーのことを言います。『*ESOPONO FABVLAS*』と同じように、日本人がヨーロッパの考え方や哲学を理解し、そして、ラテン語を学ぶために刊行されたのだと思います。西欧世界の『*Flosculi*』に中国文化圏の日本で対応するのが、『朗詠雑筆』です。『朗詠雑筆』には日本でよく知られていた漢詩、漢文や和歌、また、一般的日本人のための初等教科書『実語教』からなどの抜粋が日本語と漢文とで掲載され、当時の日本人の常識的知識がまとめられていました。ヨーロッパから布教にやって来たイエズス会士たちは、興味を持って読んだことでしょう。

『*DICTIONARIVM LATINO LVSIANICVM, AC IAPONICVM*』はラテン語の見出し語にポルトガル語、日本語の訳がならべられている辞書で、ヨーロッパ人、日本人双方のラテン語学習に用いられました。キリシタン版の『落葉集』を日本人が使うこともあったかもしれませんが、その出版の第一の目的はヨーロッパ人が日本の文字で書かれた日本語を読むときのため、そして、日本語の表記と語彙を習得するためだったと思います。『*VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM*』はローマ字で表記された日本語-ポルトガル語辞書で、日本人が使うことはまれだったでしょう。見出し語が 32,000 あり、当時地球上で出版されていたすべての言語の辞書のうち最大のものの一つでしょう。

『*DE INSTITVTIONE GRAMMATICA*』はラテン語で書かれたラテン語の文法書で、動詞の活用表を中心にとりどころにポルトガル語、日本語の訳や説明、例文があります。16、17世紀の西欧世界、あるいは、ローマ・カトリックでの共通語はラテン語でしたし、とくに、学術的な勉強をするためにはラテン語が必要不可欠でした。また、「2. 大航海

時代とイエズス会」でも述べるように、イエズス会は教育と研究を重要視しています。設立当初はプロテスタントその他の反カトリック的な力に対抗するための理論武装が必要であったし、そうでなくても、教育を重視する姿勢はひきつがれ今日にいたっています。そこで、イエズス会は、イエズス会におけるラテン語教育のため、Manoel Alvarezに文典の作成を命じ、1572年に『DE INSTITVTIONE GRAMMATICA』が出版されます。日本向けに改編した天草版の印刷は1594年でした。天草版は、ヨーロッパ人にも日本人にもラテン語の習得に役立ったでしょうし、日本語の語例や例文があったので、ヨーロッパ人の日本語学習にも役立ったはずです。それだけでなく、その日本語例文などが『ARTE DA LINGOA DE IAPAM』に採用されています。

この『ARTE DA LINGOA DE IAPAM』も日本人が読むことはなかったと思います。

以上、ここに紹介したキリシタン資料は全部で28、前述したように、このうちの6冊『SANCTOS NO GO SAGVIO』、『Manuale ad Sacramenta』、『DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM, AC IAPONICVM』、『VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM』、『DE INSTITVTIONE GRAMMATICA』、『ARTE DA LINGOA DE IAPAM』にはポルトガル語がつかわれています。

## 2. 大航海時代とイエズス会

『VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM』は見出し語が32,800、『ARTE DA LINGOA DE IAPAM』も488頁の大著で、日本語の文法、発音、方言、手紙の書式、時刻、年号などこと細かに記述されています。ポルトガル人が日本に来てから禁教令が出されるまでが70年、そして、印刷機があったのが24年、このわずかな期間に、なぜこれほど質の高い、多くの出版が可能だったのでしょうか。

その理由の一つが、時代背景です。

ヨーロッパはアジアと地続きですから、人類発生当初から「東には富がある」と思っていたことでしょう。そして、1271～95年マルコ・ポーロがアジア諸国を旅行し、ルスティケロ・ダ・ピサがその話をまとめました。『東方見聞録』です。1492年にアメリカ大陸に到達したクリストファー・コロンブスも読んでいたに違いありません。大航海時代の幕開けです。1497年にはバスコ・ダ・ガマが喜望峰を回ってインドに到

達、それから 50 年、彼らは、東の果て、日本へとやって来たのです。

国家権力を背景に西へ東へ航路を広げ、西欧諸国が富を拡大していく一方、カトリックは腐敗していきました。教会内部の腐敗は、聖職者自身によるカトリック批判を招き、内部での改革がめばえます。そこに教皇レオ 10 世による贖宥状の発売が開始され、金銭によって罪がつぐなえる、さらには、贖宥状の購入によってしかあがなえない、こととなってしまいました。ヨーロッパ、カトリックの改革は、まずは、内側から、そして、外側からなされたのです。ルターのカトリック批判に対し、イエズス会は習慣化していた多くの精神生活的日課を廃し、教育と研究、ヨーロッパにおける伝道、学校の設立と運営、異教地における布教にはげみしました。カトリックは最大の危機をのりこえ、ヨーロッパは東方へ全世界へと躍進していったのです。

世界に広がろうという機運の中、イエズス会は日本に到達し、布教をすすめて、出版物を旺盛に世に問いました。

### 3. 対訳ラテン語語彙集

豊島 (2012) によると、「対訳ラテン語語彙集」は、「16 世紀末～17 世紀初頭にイエズス会が作成した語彙集のうち、日本語とポルトガル語・ラテン語との対訳語彙・辞書を中心とする当時の多言語辞書に注目し」以下の辞書<sup>8</sup>から任意の語を検索できるようにしたネット上の検索エンジンです。

1. Cardoso : Latin to Portuguese dictionary (1592)
2. Cardoso : Portuguese to Latin dictionary (1592, annex to the above)
3. Calepinus polyglott dictionary (1592) Venezia edition : (Latin only)
4. Dictionarium Latino Lusitanicum ac Japonicum (1595) Amacusa (Jesuit Mission Press)
5. Vocabulário da língua de Japam (1603-1604) Nagasaqui (Jesuit Mission Press)
6. Barbosa : Portuguese to Latin dictionary (1611)

---

<sup>8</sup> 「Latin Glossaries with vernacular sources 対訳ラテン語語彙集」  
<http://joao-roiz.jp/LGR/>、から。

7. Bento Pereyra : Portuguese to Latin dictionary (1697)

8. Nizolius : Thesaurus Ciceronianus (1595) Basel edition (Latin only)

1 と 2 の Jerónimo Cardoso は、1508 年にポルトガル北部の古都ラメーゴで生まれた、ポルトガル語学者、ラテン語学者、辞書編纂家で、ポルトガル語で詩作する先進的な文学者でした。彼の辞書は、『*Dictionarium Latinolusitanicum et vice versa Lusitanico latinum*』で、ラテン語-ポルトガル語、ポルトガル語-ラテン語が一冊になっています。

3 の Ambrosius Calepinus は、1440 年にイタリアのベルガモで生まれ、1458 年にアウグスティノ修道会士となっています。1590 年に出版された『*Ambrosii Calepini dictionarium undecim*』では、ラテン語にヘブライ語、ギリシャ語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ベルギー語、スペイン語、ポーランド語、ハンガリー語、英語の十の言語の対訳がついています。

4 は天草で印刷、出版された『ラポ日辞書』、5 は長崎で行われた『日葡辞書』で、これらの 2 冊はイエズス会によって作成されました。

6 の Agostinho Barbosa は 1589 年にポルトガル北部の街、ギマランイスに生まれ、1611 年にポルトガル語-ラテン語の辞書『*Dictionarium Lusitanico-Latinum*』をイエズス会から出版した会士です。1208 頁に及ぶ大部の辞書で、7 の Bento Pereyra が「既存の辞書の中で最も大きい辞書だ」と言っています。

その Bento Pereyra もポルトガル人のイエズス会士で、1605 年にエヴォラ県の街、ボルバで生まれました。1647 年にリスボンで出版された『*Tesouro da língua portuguesa*』は版を重ねるごとに増補されており、「対訳ラテン語語彙集」がデータとしたのは 1697 年版です。

8 の Marius Nizolius は、1498 年に生まれたイタリアの人文学者で、1535 年に『*Thesaurus Ciceronianus*』を出版しました。これはキケロの著述に現われる語彙の辞書で、多くの版を重ねています。

「1. 「キリシタン資料」とは」で見たように、全 28 の書物のうち「sonsonete」が現われる可能性のあるもの、つまり、ポルトガル語がつかわれているものは 5 冊で、そのうちの『*DICTIONARIUM LATINO LVSITANICVM, AC IAPONICVM*』、『*VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM*』が「対訳ラテン語語彙集」でデータベース化されています。5

冊のうちの『DE INSTITVTIONE GRAMMATICA』はポルトガル語による記述自体がわずかで、「sonsonete」は使われていません。『SANCTOS NO GO SAGVIO』で使われている「sonsonete」はのちほど取り上げますし、『ARTE DA LINGOA DE IAPAM』の「sonsonete」は2016年度の紀要に書きました。

その「対訳ラテン語語彙集」のページの検索窓に「sonsonete」を入力すると、『DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM, AC IAPONICVM』、『VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM』、そして、Bento Pereyraのポルトガル語-ラテン語辞書の3冊に、計九つヒットします。そのうちの1番目が、以下の記述です。

(1) *prosodia*                      Prosodia, ae.  
DL1595 DL649A33              [P]Lus. Acento, ou sonsonete das palauras.  
   [J]Iap. Cotobano caigö.

「DL1595」は4の『ラポ日辞書』のことで、その「prosodia」の項にポルトガル語の説明として「Acento, ou sonsonete das palauras.」、日本語での説明として「Cotobano caigö.」という記述が見られることを示しています。

その影印が影印1（『羅補日対訳辞書』1979から）で、見出し語が「Prosodia, ae.」であることがわかります。これはラテン語辞書の伝統で、名詞の場合、単数主格形のあとに属格形の語尾を表示するのです。こうすることによって、その名詞がどのような語形変化をするのかが明確にわかります。「Lus.」はラテン語でポルトガル語を示す「Lusitanus」の短縮形、同様に、「Iap.」は「Iaponis（日本語）」の短縮形です。そして、[P]はポルトガル語、[J]は日本語です。

**Prosodia, ae. Lus. Acento, ou sonsonete  
das palauras. Iap. Cotobano caigö.**

影印1 Prosodia

つまり、影印1<sup>9</sup>は、ラテン語の「prosodia（音調、アクセント：単数

<sup>9</sup> 影印1の「Lus.」、「das」、「palauras」の「s」は短いですが、「Prosodia」、「sonsonete」の「s」は長い「f」になっています。

主格形)」の属格系の語尾は「æ」で、ポルトガル語では「Acento, ou sonsonete das palauras (アクセント、あるいは、語の sonsonete)」、日本語では「Cotobano caigö<sup>10)</sup>」の意味があるということです。

#### 4. キリシタン資料における「sonsonete」

「対訳ラテン語語彙集」でヒットした残りの八つの「sonsonete」と該当箇所影印を見てみましょう。

##### (2) *tenor*

DL1595 DL815B31

Tenor, ôris.

[P]Lus. Acento, ou sonsonete das palauras.

[J]Iap. Cotobano caigö.

Tenor, ôris. Lus. Acento, ou **sonsonete** das palauras. Iap. Cotobano caigö. ¶ Interdum, Teor, ou ordem continuada. Iap. Vonaji yöni tçuzzuqu xidai. ¶ Tenor pugnae Lus. Teor, ou maneira da peleija. Iap. Tatacai yö.

影印 2 Tenor

『ラポ日辞書』での「tenor」についての記述は「prosodia」のと同じです。違っているのは、「¶<sup>11)</sup> Interdum (ラテン語：時々)」以下で、ポルトガル語で「Teor, ou ordem continuada (継続する制度、あるいは、秩序)」、日本語で「Vonaji yöni tçuzzuqu xidai (同じようにつづく次第)」、さらに、ラテン語で「Tenor pugnae (戦い方)」、ポルトガル語で「Teor, ou maneira da peleija (戦いの方法、あるいは、やり方)」、日本語で「Tatacai yö」とあります。

##### (3) *asocona*

DJ1603<sup>12)</sup> DJ013C47(D1)

[P] ¶ Item, Interi. De espanto como

[J] Areua,

[P] com hum certo sonsonete.

<sup>10)</sup> 「caigö」は「開合」で、国語学会(1980)に「中国・日本の音韻学で、口の開き方などの印象で発音の違いを区別する用語」とあります。

<sup>11)</sup> 「¶」は、新しい段落が始まることを示すマークです。

<sup>12)</sup> 「DJ1603」は、『日葡辞書』を示しています。

**Afocona. Pron. Aquelle, aquella, ou daquel-  
la parte. q Item, Interi. De espanto cōmo  
Areua, com hum certo sonsonete.**

影印 3 Asocona

『日葡辞書』<sup>13</sup> の記述です。「Afocona」は「Asocona」で、「あそこな」。「Pron.」は「Pronome (代名詞)」で、「*Aquelle, aquella, ou daquela parte.*」は現在のつづりの「aquele (あの)」の男性形と女性形、「ou」は英語の「or」で、その後の「*daquella parte*」を直訳すると「あの部分の」となります。

「¶」以下の「*Item, Interi. De espanto como Areua, com hum certo sonsonete.*」は、「さらに、感嘆詞。ある種の sonsonete をともなった「あはれ」<sup>14</sup> のような驚きをあらわす」と訳せます。

(4) *couasaqi*

[J] Couasaqi.

DJ1603 DJ060C17(P4)

[P] *Som, ou sonsonete de palaura.*

**Couasaqi. Som, ou sonsonete de palaura?**

影印 4 Couasaqi

「*couasaqi*」は「声先」で、「Som」はポルトガル語「音、声」、「*sonsonete de palaura*」は、(1)、(2)に現われた、「*sonsonete das palauras*」と定冠詞「as」の有無と名詞「*palaura*」の単複とがことなっていますが、意味は同じだととらえていいでしょう。

(5) *cuchibiqi*

[J] Cuchibiqi.

DJ1603 DJ062C40(Q2)

[P] *Sonsonete, ou modo de falar, pello qual se entende de hum que consente, ou concede algũa cousa, &c.*

<sup>13</sup> 影印は、『日葡辞書』(1973)によっています。

<sup>14</sup> 当時の「あはれ」は、現代語の「ありゃ!？」に相当するものと思われま

Cuchibiqi . **Sonsonete**, ou modo de falar, pello qual se entende de hum que consente, ou concede algũa cousa, &c.

影印 5 Cuchibiqi

「cuchibiqi」は「口びき」で、「Sonsonete, ou modo de falar, pello qual se entende de hum que consente, ou concede algũa cousa, &c.」は「あることに同意している、あるいは、認めているということがわかるような sonsonete、あるいは、話し方」です。

(6) cuchiburi

[J] Cuchiburi. i. Cuchibiqi.

DJ1603 DJ062C44(Q2)

[P] *Modo de falar, ou sonsonete das palauras.*

Cuchiburi . i. Cuchibiqi . **ou sonsonete** das palauras . **Modo de falar,**

影印 6 Cuchiburi

「cuchiburi」は「口ぶり」で、「口びきに同じ」。「Modo de falar」は(5)にもあるように「話し方」で、「sonsonete das palauras」は(1)、(2)、(4)と同じです。

(7) to>in <sup>ママ</sup><sup>15</sup>

[J] Tõin. Taitõno coye.

DJ1603 DJ259D22(Ttt3)

[P] *Voz, ou sonsonete proprio da China.*

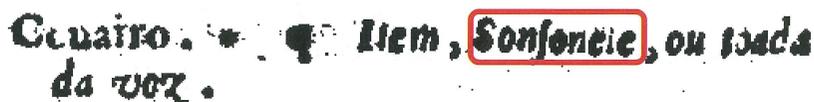
Tõin. Taitõno coye. **Voz, ou sonsonete** proprio da China.

影印 7 Tõin

<sup>15</sup> 開合をあらわす「v」が、モニター上でズレたものと思われます。本来は、「tõin」と表記されるべきものです。

「Tõin」は「唐音」で、「Taitõ」は「大唐」、「coye」は漢字の音のことです。ポルトガル語の「Voz, ou sonsonete proprio da China」を訳すと、「声、あるいは、中国本来の sonsonete」となります。

(8) couairo [P] \*<sup>16</sup> ¶ *Item, Sonsonete, ou toada da voz.*  
DJ1603 DJ341D25S(r3)

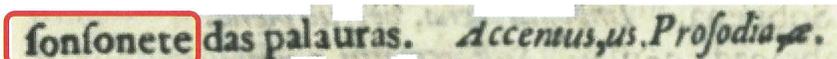


Couairo. \* ¶ Item, **Sonsonete**, ou toada da voz.

影印 8 couairo

影印 8 の見出しは「声色」、語義の訳は「つまり、sonsonete、あるいは、声の調子」です。

(9) sonsonete [P] *Sonsonete das palavras.*  
PPL1697 PPL1697113 Accentus, us. Prosodia, ae.



**sonsonete** das palavras. Accentus, us. Prosodia, ae.

影印 9 sonsonete

「PPL1697」は Pereyra の『*Tesouro da língua portuguesa*』のことで、この辞書には(1)、(2)、(6)に見られた「sonsonete das palavras」が見出し語としてあげられています<sup>17</sup>。そのラテン語の対訳が「*Accentus, us. Prosodia, ae.*」です。水谷 (2015) によるとラテン語の「*accentus*」の語義は「1.アクセント、強勢。2.強さ、激しさ。」、「*prosodia*」が「(音節の) 音調、アクセント」です。Pereyra の初版は 1647 年で、その頃には「sonsonete das palavras」という言い回しが固定化し、「sonsonete」は「アクセント、音調」という意味を持つようになっていたのでしょう。

「対訳ラテン語語彙集」でヒットしたこれら九つのうち(1)、(2)、(6)、

<sup>16</sup> この「\*」が何を示すかは、不明です。

<sup>17</sup> Pereyra の影印は、BIBLIOTECA NACIONAL DE PORTUGAL のホームページ、[http://purl.pt/29129/4/res-2941-a\\_PDF/res-2941-a\\_PDF\\_24-C-R0150/res-2941-a\\_0000\\_1-222\\_t24-C-R0150.pdf](http://purl.pt/29129/4/res-2941-a_PDF/res-2941-a_PDF_24-C-R0150/res-2941-a_0000_1-222_t24-C-R0150.pdf) によっています。



ここで、「gonbi」は「qixocu」とならべて使われています。「cotoba no yauarague」に見られる「qixocu」の記述は、影印 12 のとおりです。

cocoro no iro  
Qi-xocu - Sembrante

影印 12 Qi-xocu

ポルトガル語「sembrante」の意味は「顔、外見、様相」で、見出し語「Qi-xocu」の上の「cocoro no iro (心の色)」とは、かなりことなっています。該当箇所の翻字は、「帝王サンタの知恵のかしこさと、天下無双の美人なることを見て、よこしまなる望みを起こされん気色と、言尾とを察し給ひて、少しもとりあはぬことを宣ひ。」(キリシタン資料集成、1979)で、これを見ると「qixocu」は見た目の様子、「gonbi」は物言いの調子となり、文脈から解釈すると、どちらもあまりいい意味ではなさそうです。

## 6. 『ARTE GRANDE』の「sonsonete」

Baba (2017) では、『ARTE GRANDE』と『ARTE BREVE』にあらわれる計 13 の「sonsonete」を「もったいぶった調子」、「ゆるんで田舎臭い調子」、「ポルトガル語の干渉」、「有声子音の前の鼻音性」、「イントネーションのような韻律的特徴」の五つの意味で使われているとしました。「韻律的特徴」というのは、言語音声の高さ、長さ、強さなどで、個々の語音とはことなる特徴のことです。

これら五つのうちの、「イントネーションのような韻律的特徴」の意味で使われているのは、『ARTE GRANDE』第 173 葉表、裏の三つの「sonsonete」で、これらは「tom」、および、「accento」と並べて使われています。

Bluteau (1789) の「tom」、「accento」の記述は、以下の通りです。

TOM , f. m. certa inflexão da voz, § Certo grao de elevação, ou abatimento della, ou de outro fom v. g. ,, o tom da agua que passava, e cahia ,,

訳すと、以下の通りです。

TOM 男性名詞、ある種の声の抑揚。§ ある程度の上昇、あるいは、その上昇の、あるいは、他の音の衰弱 例えば、流れていた、あるいは、落ちていた水の *tom*。

つまり、声や物音の抑揚でしょうか。

ACCENTO , f. m. o tom de voz, com que se pronuncia as vogaes, mais, ou menos fortemente.

§ O final orthografico, com que indicamos o tom das vogaes. § A inflexão da voz, com que se pronuncia alguma frase interrogativa, admirativa, pathetica, e este se diz *accento Oratorio*, diverso do das vogaes, que he *profódico*.

訳すと、以下の通りです。

アクセント 男性名詞 おおよその場合強く発音される母音にもなう声の調子。§ 母音の調子を示すために使う正書法上の記号。§ 質問だとか、感嘆や嘆願だとかのときの声の抑揚。韻律的であるところの母音のアクセントとはことなり、*acento Oratório* とよばれるもの。

つまり、母音の調子、正書法上の補助記号、発話音調です。

「声や物音の抑揚」、「母音の調子」、「発話音調」に共通の意味をつむぎだすと、やはり、「イントネーションのような韻律的特徴」となりそうです。

## 7. なぜ「sonsonete」なのか

ポルトガル人と日本人、16、17世紀と20、21世紀の違いはあっても、同じ日本語教師だということで、私はずっと João Rodriguez を追いつけています。その著『ARTE GRANDE』と『ARTE BREVE』に計13あらわれる「sonsonete」の語義は謎に包まれ、研究が続けられてきました。キリシタン研究自体がすすみ、Rodriguez の著作以外の「sonsonete」にまで目が向けられるようになり、私も調べてみました。でも、結局、現代のポルトガル語辞書 (Houaiss, 2009) にある以下の記述でいいように思います。

**sonsonete** /ê/ s.m.(1595) 1 modo de pronunciar; acento, prosódia 2 acentuação com que se proferem observações irônicas ou maliciosas

訳すと、「sonsonete」の強勢のある母音の発音は「/ê/（口の開きの狭いエ）」で、「男性名詞」、「（初出は）1595年」で「1発音の方法。アクセント、韻律」、「2皮肉や意地の悪さをあらわす発音上の強調」となります。一つは「発音のし方」というおおざっぱな意味、そして、もう一つは「感じのよくない発音」です。

では、なぜ「sonsonete」なのでしょう。その理由は、語の出自にあるようです。

da Cunha (1982)によると、「som（音）、tom（調子）、accento（アクセント）、pronúnciação（発音）」はすべてラテン語起源で、一方、「sonsonete<sup>19</sup>」は Houaiss(2009)によると1595年に、そして、Coromines (1954)によれば1604年にさかのぼるスペイン語起源の語です。つまり、ポルトガル人にとって、「sonsonete」は目新しかった。そして、da Cunha (1982)によると、「entonação（イントネーション）」が現われるのは20世紀です。「som、tom、accento、pronúnciação」では表現しきれず、後世の「entonação<sup>20</sup>」が持つ意味を「sonsonete」で言い表したかったのでしょう。

## 文献目録

1. João Rodriguez (1604), *ARTE DA LINGOA DE IAPAM*, Companhia de IESV
2. 馬場良二 (2015) 『João Rodriguez『ARTE GRANDE』の成立と分析』 風間書房
3. 馬場良二 (2017) 「João Rodriguez を追いつけて」『文彩』VOL.13、

---

<sup>19</sup> Houaiss (2009)によると、「sonsonete」は、ラテン語の「sonus」がスペイン語で「son」となり、それが二つ重なった形に縮小辞の「-ete」が接続したものです。

<sup>20</sup> 「entonação」は、名詞を動詞化する際に語の頭につける接辞「en-」と名詞「tom」、そして、動詞を名詞化する接辞「-ção」によって構成されています。「tom」に「en-」と動詞活用をする語尾「-ar」がついて動詞「entonar」が生成され、それが名詞化したのです。

熊本県立大学文学部

4. Ryoji Baba (2017) João Rodriguez's 'sonsonete' in *ARTE GRANDE, Journal of the Faculty of Letters*, vol. 23, Prefectural University of Kumamoto
5. 土井忠生訳注 (1955) 『日本大文典』三省堂
6. 島正三編 (1969) 『ロドリゲス日本大文典』文化書房博文社
7. *VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM* (1603) Companhia de IESVS
8. 『日葡辞書』(1973) 勉誠社
9. 『羅葡日対訳辞書』(1979) 勉誠社
10. Bento Pereyra (1647) *Tesouro da língua portuguesa*, officina de Paulo Craesbeek: [http://purl.pt/29129/4/res-2941-a\\_PDF/res-2941-a\\_PDF\\_24-C-R0150/res-2941-a\\_0000\\_1-222\\_t24-C-R0150.pdf](http://purl.pt/29129/4/res-2941-a_PDF/res-2941-a_PDF_24-C-R0150/res-2941-a_0000_1-222_t24-C-R0150.pdf)
11. Instituto Antônio Houaiss (2009) *Dicionário Houaiss da língua portuguesa*, Editora Objetiva Ltda.
12. Antônio Geraldo da Cunha (1982) *DICIONÁRIO ETIMOLÓGICO NOVA FRONTEIRA DA LÍNGUA PORTUGUESA*, Editora Nova Fronteira.
13. Joan Coromines (1954) *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, Editorial Gredos
14. 國原吉之助 (2010) 『古典ラテン語辞典』大学書林
15. 水谷智洋 (2015) 『羅和辞典<改訂版>』研究社
16. キリシタン資料集成 (1976) 『サントスの御作業』勉誠社
17. キリシタン資料集成 (1979) 『サントスの御作業 翻字 研究篇』勉誠社
18. 尾原悟編著 (1996) キリシタン文学双書『サントスのご作業』教文館
19. 橋本進吉 (1932) 「國語に於ける鼻母音」『方言』第二卷第一號
20. 橋本進吉 (1950) 「國語に於ける鼻母音」『國語音韻の研究』岩波書店
21. 山田昇平 (2014) 「ロドリゲス『日本大文典』における “sonsonete” —濁音前鼻音記述をめぐって—」『四天王寺大学紀要』第 58 号
22. 豊島正之 (1984) 「「開合」に就て」『国語学』136
23. 豊島正之 (2012) 「イエズス会辞書類データベースに基づく対訳を

經由する語彙画定過程の研究科学研究費補助金研究成果報告書」：  
[https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKEN HI-PROJECT-20520408/20520408seika. pdf](https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKEN_HI-PROJECT-20520408/20520408seika.pdf)

24. 豊島正之（2013）『キリシタンと出版』八木書店

25. Latin Glossaries with vernacular sources 対訳ラテン語語彙集：  
<http://joao-roiz.jp/LGR/>

26. 王 彩芹（2011）「日本初のグーテンベルク印刷機の歴史的意義」、  
周縁の文化交渉学シリーズ 2 『天草諸島の文化交渉研究』 pp.91-100

27. 国語学会（1980）『国語学大辞典』東京堂出版

（URL 取得日：2017 年 5 月 7 日）

## 天草記

馬場 良二

今日は、2017年8月15日。日本の降伏を天皇が国民につげた日だ。

黒髪小学校での教育実習が28日から30日、米国ブッカー・T・ワシントン高校が10月25日水曜日、中国の広西大学と広西師範大学が10月31日から始まる。模擬授業があり、そのための教室の予約依頼がメールで来る。航空券の予約と学生支援機構の奨学金の手続きを実習生たちに連絡し、黒髪小での実習生には「誓約書」を書いてもらう。試験期間があけたばかり、うだるような暑さの中、学生たちが動いている。

2017年8月12日土曜日から13日日曜日にかけて、日文2年の東友輝哲、英文2年の竹山陸斗と自転車で天草へ行った。

そもそものことの起こりは、帯山通りのパチンコ屋の前あたりだ。今年だったか、去年だったか、おぼえていない。ゴールデンウィークの前の晴れて、暑い日だったような気がする。街の方へ自転車で走っていたら、竹山も走っていた。追いついて並んだか、それとも、立ち止まって「今度、天草までチャリで行こう」と言ったか、とにかく、さそった。しばらくすると、竹山から東も行くとなり、7月の演習の授業のあと、いつにするか聞かれ、試験のあとの8月の早い時期、11日から13日あたりとなった。東が宿をとってくれた。

問題はいくつもあるが、一番は左のフクラハギだった。

大学に入って、バレーボールをはじめた。体力も筋力もないし、第一に、運動神経がまるでない。だから、球拾いをしてすごそうと考えていた。しかし、弱小チームだったからだろう、2年から試合に、後期からスタメンになっていた。打ち込んだ。3年の秋で引退したが、練習に出続け、間があいたのは、修士の2年の4月にブラジルへ留学した時だけだった。2年間。帰国して、火水金土の練習にもどり、試合にもついて行った。日本語学校に就職してからも土曜日の練習に出ていた。

1989年、熊本にやってきて、上京のときに顔を出すだけになった。1993年に結婚し、体を動かすことはなくなった。そんな時だろうか、文学部棟の玄関のコンクリートの上がり縄跳びの二重とびをし、ふくらはぎを痛めた。



- A** 熊本県立大学
- B** ローソン 熊本薄場力合店
- C** 藍のあまくさ村
- D** 国道 266 号線
- E** 国道 266 号線
- F** 旅館有明荘
- G** 有明町上津浦
- H** 国道 324 号線
- I** 松島有料道路 往復で 250 km。

ときおり痛みがぶり返すようになったのは、五十くらいからだろう。ひどい時は、横断しようと、歩道から車道におりただけで、いためたり。2012年にバレーボールを再開してからは、パスをしていて後ろに一步さがったときに、いためたり。一度いためると、ひと月近く運動ができない。左足で地をけろうとすると、「ピキッ！」といきそうになるか、いってしまうか。

今回いためたのは、7月の下旬だったと思う。8月上旬の東京出張では、まだ足を引いていた。はじめて病院へ行った。肉離れだった。足首をまげてフクラハギの筋肉を伸ばすことはできるが、地を蹴ることやつま先立ちなど、足首を伸ばす動作ができない。自転車をこいでいる最中に悪化したら、進めない。

ムクミも気になった。六十前あたりから疲れて夕方になると、両足のフクラハギが浮腫むようになった。部活で激しい運動をすると、ムクミが引く。最近、鍛えられ、よほど疲れていてもあまり浮腫まなくなっていた。

今回は、左だけだ。8月に入ったころからひどくなり、一時は、足首が右の倍ほどになった。

12日の朝8時に研究室 (A) に集合。すでに自転車で天草まで行ったことのある竹山が先導し、東があとにつく。私と二人とどちらの方が私のことを心配しているだろう。

まだ暑くない。爽快。東バイパスにでて、南下。九州新幹線にぶつかる前で左折し、さらに南下。国道57号線を走り、三角をとおり、天草五橋をわたる。歩道部分が車道よりかなり高く、しかも、狭い。すき間から海が見え、吹きっさらしで風も強く、命があぶない。

昼食時には、元気だった。「ここまでは、楽勝だ」などと言いついていた。五橋の最初の橋をわたって「藍のあまくさ村 (C)」については、かなりできあがっていた。思った以上にのぼりが多く、きつい。名産のちくわを頬張り、ソフトクリーム、かき氷を食べ、水分を補給。五橋を渡りおえると上島で、山を越えていくか海沿いにすすむかを選択した。もちろん、海沿いだ。

間違いだった。八代海沿いにすすんだのだが、登り下りがきつかった。フクラハギは悪化していなかったが、腰がへんに痛くなり、疲れで、降りて引くことが多くなった。宿 (F) については6時を回っていた。あした、自転車をこぐことができるのだろうか。

もともと自転車が好きだったが、東京では持っていなかった。自分の自転車は、小学校が最後だったかもしれない。1989年に熊本に赴任し、すぐにロードレーサーを買った。空港まで行き、分解してパッキング、羽田で組み立てて家に帰り、東京を走り回ったこともある。日本語学関係の合宿が毎年九重であり、鹿児島大学の先生と行ったこともある。外輪山はなだらかな路面が続き、空を飛ぶようだった。

阿蘇へ行ったのだから、次は、天草。そう思い続けて2017年。ようやく夢が実現した。しかも、教え子と一緒に。

陸斗は、学部のオリエンテーションの日（入学式の前にある）だったか、学期が始まってすぐだったか、「日本語教師という職業があるのをはじめて知りました。勉強したいと思います」と研究室に言いに来た。友輝哲は、鹿児島出身の癒し系で、日本語教師を目指して熊本へ来た。二人は大の仲良しだ。陸斗は、英文女子全員からカワイイと言われ、友

輝哲は拾ったネコを鹿児島から連れてきて飼っている。

陸斗は色白で、顔も腕も膝もふらはぎも真っ赤。友輝哲はもともと色が黒く、やけていないし、痛くもない。三人で風呂に入り、浴衣を着て、夕飯を食べた。



刺身にタイの塩焼きにカニに貝汁、海老天もあった、ご馳走だ。デザートにメロンもあった。

部屋にもどると、私はうごけない。壁に寄り掛かってすわり、微動だにできない。

エアコンの寝息、明け方ユキノリが2回くしゃみをした。

7時半に朝食がととのい、9時すぎに出発した。266号線に出てから、大ぶす像により、有明海側を海に沿って行く。大ぶす像は、ふるさと1億円するとき、台湾から石を運んだそうだ。高さ10m、重さ320t。

きのうは痛くなかったお尻がイタイ。グリップを握る手がイタイ。体



重をかけるだけで、人差し指と親指の股の皮膚がイタイ。今もまだ痛い。扇風機の風が当たり続けた時のように右の肩甲骨のあたりがイタイ。パシッと張る感じだ。尻が痛くてすわりなおそうとすると、手に体重がかかかって、いたい。ブレーキをかけるために手を持ちか

えると肩がイタイ。登り、下りに合わせてギアをこまめに変えなくてはならない。そのたびに指の股が痛み、背がいたむ。

上り坂で立ち  
部を支えること  
せず降りて、引  
おりるとき、  
にはね上  
らない。  
身の力  
る。

左  
ラハ  
ちこたえ  
むしろ、肉離  
こかへ行ってし  
れない。きのう、右のフ  
感を覚えた。まさか右足が  
はなく、筋肉痛のようだ。

ブラジルからもどったばかりの頃、ま  
出ていた。ブロックに飛び、スパイクにさわっていた。でも、着地の方が筋力を必要とする。全身のバランスも落ちていたし、タイミングもくるっていたのだろう。失敗して、右ひざをねん挫したことがある。パンパンに膨れ上がり、熱を持ったままアルバイトに行った。おさまって、何年かした頃、その膝を職場の机の引き出しで軽く打ち、膨れ上がり、水をためた。だから、今でも右ひざは弱く、それで、ひざの内側の筋肉が痛みだしたのに違いない。

日が射すと、腕と膝とふくらはぎの日焼けが、ヤケドがヒリヒリ痛い。  
もうとにかく、ドコもカシコも全部いたい。年寄りにはバランスが悪いから、縁石にぶつけるんじゃないか、路面の溝にはまるんじゃないか、何も無いところでよろけて転ぶんじゃないか、気を張り続けなくちゃいけない。ハンドルを強くにぎるせいで、胸の筋肉も張っている。道はどんどん暗くなる。

それでも、無事に家についた。9時に近い。シャワーで見ると、左の足首がほそくなっていた。

こぎがしたくても、片足で体重全  
ができない。力が入らない。無理  
くのだが、自転車を止めて  
右足を大きく後ろ  
げなくてはな  
息を止め、全  
を振り絞

のフク  
ギは、持  
ている。  
れなんかど  
まったかもし  
クラハギに違和  
肉離れ？そうで

だ手がネットから

